

土木技術者の矜持を問う

(一社)全国土木施工管理技士会連合会
顧問 小林康昭

昨年10月中旬に明るみに出たマンションの基礎杭打工事データ偽装の不正行為は、一つの現場や特定の業者の不祥事ではなく、全国の基礎工事全体が構造的に陥っている体質化した実態を露呈してしまった。

不正行為と断じる根拠は、当事者が悪いことと自覚していた確信犯だったこと、当事者はその行為が及ぼす影響を承知していたこと、その行為によって労力か金銭の面で得しようとの魂胆があったこと、ということである。

様々な人々が、メディアを通して様々な主張や意見を開陳している。だが、議論をマクロに捉えると、問題は拡散する。拡散すると、核心が矮小化する。すると、問題点が曖昧になる。

不正行為には、それによって利益を侵害される者自身が、利益を侵害されないように、すなわち、完成物の品質を確認し不正を見逃さないように、管理を厳格かつ確実に対処することに尽きるのである。

利益を侵害される者とは、発注者である。不正を企んだ者が下請会社だったら、発注者とは元請会社のことである。元請会社の現場管理者が、管理の手間や費用を惜しんだ結果、その怠慢と恠気に付け込まれた行為なのである。

外国で日本の建設会社が仕切る工事現場に、現場監督の姿がない、と批判されることがある。怠慢と気の緩みが責められているのである。

この怠慢と気の緩みの原因は、二つ考えられる。

その一つは、日本的な商道德と職人氣質の伝統にあると思う。顧客を大事にする長年の商道德は、顧客を裏切らない、顧客の期待に応える、という信頼関係を作り上げた。それ故に、顧客や発注者は、業者を詮索しない。職人氣質もまた、顧客や発注者に監督されなくても、立派に仕事を仕上げて見せる誇りを持っている。だから、顧客や発注者は、現場を任せきっている。そこに気の緩みが生じ、怠慢に陥るわけである。

二つ目は、重層構造の弱点である。重層構造は、上位会社が間接統治する構造である。元請は一次下請けに任せ、一次下請けは二次下請けに、二次下請けは……、というように実際に仕事をするのは、元請と無縁の作業員である。元請会社の担当者は、現場の実態を把握出来ないし、その気もない。その弱点が突かれたわけである。

建築工事が専ら槍玉に挙がっているが、常日頃、下請任せにしている現場の土木技術者は、対岸の火事と傍観してはならない。同じことを犯す恐れがあるからである。

すなわち、工期重視に陥って品質を犠牲にしないこと、書類の体裁にばかりこだわって現場の実情を等閑にしないこと、下請におんぶして管理監督検査の義務を放棄しないこと、である。

常識的に管理監督検査を励行すれば、重層構造を糺せとか、杭工事の指針を作れとか、記録を残せる機材の導入とか、データの即日提出義務の励行とか、は不要な意見なのである。不祥事をなくすのは、現場技術者の矜持に支えられた心構えにある。